武蔵野日曜集会

羔と鳩
――ヨハネ伝第1章19～34節――

１９６７年７月２日（武蔵野）
小池辰雄

終末的実存　神の来臨　神の羔羊　エッセネ派　鳩の如く　「アルミオン」　聴く耳あるものは聴くべし　神一切　懐の事態　神の国　十字架という関門　聖霊のバプテスマを受けよ　キリストにあって生きる　一切の秘訣

【ヨハネ1・19～34】

19 さて、ユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とをヨハネの許に遣して
『なんじは誰なるか』と問わせし時、ヨハネの証はかくのごとし。20 すなわち
言いあらわして諱まず『我はキリストにあらず』と言いあらわせり。21 また
問う『さらば何、エリヤなるか』答う『然らず』問う『かの預言者なるか』
答う『いな』22 ここに彼ら言う『なんじは誰なるか、我らを遣わしし人々に
答え得るように為よ、なんじ己につきて何と言うか』23 答えて言う『我は預
言者イザヤの云えるが如く「主の道を直くせよと、荒野に呼わる者の声」なり』
24 かの遣わされたる者は、パリサイ人なりき。25 また問いて言う『なんじ若
しキリストに非ず、またエリヤにも、かの預言者にも非ずば、何故バプテス
マを施すか』26 ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじら
の中に知らぬもの一人たてり。27 即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の
紐を解くにも足らず』28 これらの事は、ヨハネのバプテスマを施しいたりし
ヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。
29 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これ
ぞ世の罪を除く神の羔羊。30 われかつて「わが後に来る人あり、我にまされり、
我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。31 我もと彼を知らざりき。
然れど彼のイスラエルに顕れんために、我きたりて水にてバプテスマを施す
なり』32 ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鴿のごとく天より降
りて、その上に止れり。33 我もと彼を知らざりき。然れど我を遣し、水にて
バプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に
止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。34 わ
れ之を見て、その神の子たるを証せしなり』

●終末的実存

19さて、ユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とをヨハネの許に遣して『なんじは誰なるか』と問わせし時、ヨハネの証はかくのごとし。20すなわち言いあらわして諱まず『我はキリストにあらず』と言いあらわせり。21また問う『さらば何、エリヤなるか』答う『然らず』問う『かの預言者なるか』答う『いな』22ここに彼ら言う『なんじは誰なるか、我らを遣わしし人々に答え得るように為よ、なんじ己につきて何と言うか』23答えて言う『我は預言者イザヤの云えるが如く「主の道を直くせよと、荒野に呼わる者の声」なり』

洗礼のヨハネは、ヨハネ伝ではあまりこの人の在り方がわからない。マタイ伝やマルコ伝をみると、どういう人であるかということが書いてある。

「ラクダの毛皮を着て腰には革の帯をしてイナゴと野蜜を食べている」

というような、まことに野の野人である。

「もう世の終りが近づいてきた。お前たちは悔い改めなくてはダメだ」

と。そういう預言者として現われてきた。とにかくここに不思議な人物が現われたので、一体誰だというわけで、みんなが聞いているところが今読んだばかりのところに書いてある。エリヤの再来かと思ったり、また、かの預言者エレミヤかと思ったり、いろいろですが。どちらでもないと。自分は預言者イザヤが言った――第二イザヤのイザヤ書40章にでている――

「荒野に呼ばわる声」

であると言う。イザヤ書40章をみますと、

「1なんじらの神いいたまわく、なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ。2懇ろにエルサレムに語り之によばわり告げよ、その服役の期すでに終り、その咎すでに赦されたり。そのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしところは倍したりと。」（イザヤ40・1～2）

イスラエルの民はバビロニア捕囚の50年間これに服した。即ち、イスラエル民族というのは、紀元前千年少し前あたりから政治的には北イスラエル王国、南ユダ王国とに分かれた。民族としてはもちろんイスラエルの民ですが、これがアッシリアおよびバビロニアにそれぞれイスラエルとユダが滅ぼされた。即ち、神の審判がアッシリアをとおし、またバビロニアをとおしてイスラエルおよびユダに臨んだ。紀元前586年にユダの国があとで滅びたわけですが、それから50年間くらいバビロニアに捕囚されて、罪に対する罰を受けたのが、いわゆる「バビロニア捕囚」という。その服役のときが既に終って、罰を受けて赦されたから帰れと。また、帰るのも、これはペルシヤの王クロスがやはり神の手となってイスラエルの民を、エルサレムを中心とする元の所へ帰した。それはもはや国ではなくて、エルサレムを中心としたところの宗教的な民としてであった。それから後をユダヤ教という。

紀元前515年に第二神殿ができてからあと、神殿中心の祭司的な宗教、戒律的な宗教に決まってきた形をとってきた。それ以前はもちろん律法はありましたけれども、特に預言者の生き生きとした宗教が祭司宗教に対してハッキリとあった。それからあとはむしろ祭司宗教が非常に主導的になってきた。

そういう、エルサレム帰還ということを無名の預言者がこの40章から55章まで素晴らしい預言の展開をしたわけです。その3節のところに、

「[3]**よばわるものの声きこゆ云く、なんじら野にてエホバの途をそなえ沙漠にわれらの神の大路をなおくせよと。**」（イザヤ40・3）

これが即ち今、「荒野に呼ばわる」ところの洗礼のヨハネがこの句を自分の使命として受けとったわけです。聖書の宗教は絶対に歴史の宗教でありまして、歴史を度外視して聖書の宗教はない。悟りの宗教ではない。それだからこれを啓示宗教というので、驚くべき神の歴史哲学がある。事実をもって迫ってくるところの事態です。私がいつも

「聖書はドラマである」

と言うのはその意味です。ドラマ的に歴史的に展開しているものであって、決して悟りというようなことではない。

その歴史の中に預言が出てくる。しかしながら、その預言は今から何百年あとに洗礼のヨハネなんてものが出てくるという、そういったようないわゆる予言ではない。預言者はそのときにいかなることが先に起こるか知らん。けれども、神のおとずれとなり、口となって、歴史に展開してくるところの神さまの事態を自らは知らずして預言させられている。それが事実となって顕れてくる。それが本当の預言の預言たるところであります。

とかく、世の中には妙な予言をして、いつごろどうなるだのこうなるだのと、こういうのは非常にまゆつばものでありまして、聖書はそうではない。

「いつも神の国は、終末は時々刻々迫っている。明日にも終末は、世の終りはくるかもしれない」

というのが、我々の歴史に対するところの終末的自覚です。私がいつも言っているところの「終末的実存」というものは、歴史の展開を土台に置かないで「終末」という言葉はありえない。

福音、喜びの音信というのは、イエス・キリストも、また使徒たちも、神の終末をじかじかに感じて、そういった終末的現実において語られたものであって、ただいい加減な現在において語られたものではない。我々の福音の世界もまさにそういった終末的な、「エスカトローギシュ」な自覚においてのみ本当である。

●神の来臨

この預言者の言葉をはたと受けとったのが洗礼のヨハネであった。イザヤ書40章のその

先をもう少し読んでいきますと、

「9**よき音信をシオンにつたうる者よ、**

「エルサレム」という言葉は別な言葉で「シオン」という。シオンの丘というのはエルサレムの町の東北の方にある小高い所です。

なんじ高山にのぼれ。嘉おとずれをエルサレムにつたうる者よ、なんじ強く声をあげよ。声を揚げておそるるなかれ。ユダのもろもろの邑につげよ、なんじらの神きたり給えりと。

神の来臨ということ。

10**みよ主エホバ能力をもちて来りたまわん。その臂は統治めたまわん。賞賜はその手にあり。はたらきの値はその前にあり。**11**主は牧者のごとくその群をやしない、その臂にて小羊をいだき之をその懐中にいれてたずさえ、乳をふくまする者をやわらかに導きたまわん。**」（イザヤ40・9～11）

イザヤ書40章11節というのは聖書の中でも極めて重要な句の一つだと私は思ってます。特に信仰的にみても、非常にこれは大事な言葉です。

「キリストは神の懐に居た」

とヨハネ伝に書いてありましたね。その同じ表現がここでも、

「その臂にて小羊をいだき之をその懐中にいれてたずさえ」

と。実に懇ろに羔を懐に入れているという牧者である。しかも、その牧者ヤーヴェーの神は、

「10**みよ主エホバ能力をもちて来りたまわん。その臂は統治めたまわん**」

という。世界統治の神であり、本当の力を持っている。それが懐には羔を持っているという。実に不思議な深遠な表現をしているわけです。

「荒野に呼ばわる声」

というのは、何を呼ばわっているかというと、世の終りと審判、そして審判に対して悔い改めの事態です。もうひとつ、指し示すものがある。ダビンチが洗礼のヨハネを描いて、指を天に向けている絵がありますが、もちろんこれはキリストを示している。

24**かの遣わされたる者は、パリサイ人なりき。**25**また問いて言う『なんじ若しキリストに非ず、またエリヤにも、かの預言者にも非ずば、何故バプテスマを施すか』**

「バプテスマ」というのはなにもユダヤに始まったことではない。これはギリシアの密儀教にもある。とにかく、水をもって清めるというようなことは日本にもあるわけで、水の潔め、祓い清めというようなことは宗教の事態にはよく伴っていることです。特にこれはもともと、「浸す」という意味で、旧約聖書を多少見てみると、レビ記と民数記略にたくさん出てます。レビ記の14章あたりからずっと出てます。これはみんな地上のことに対する清めのことで、水が清めるといったようなことです。民数記略19章にも似たようなことが出ている。

イザヤ書1章16節に、

「16 **なんじら己をあらい己をきよくし、わが眼前よりその悪業をさり、悪をおこなうことを止め**」

とある。この「己をあらい」というのはもちろん水で洗うことなので、水で洗うことから比喩的に預言者は使っているんでしょうけれども。

それから、有名な話がありますね、列王紀略下5章のところに、

「10 **エリシヤ使いをこれに遣わして言う、汝ゆきて身をヨルダンに七たび洗え、然ば汝の肉本にかえりて汝は清く為べしと。**……14 **是においてナアマン下りゆきて神の人の言のごとくに七たびヨルダンに身を洗いしにその肉本にかえり嬰児の肉の如くになりて清くなりぬ。**」（列王記略下5・10～14）

とある。水でもって清められるということです。肉体的にもまた精神的にも清める。そこで、悔い改めて清められるというようなことが、この「バプティゾー」「浸す」という言葉の内容になるわけです。だから、ユダヤ教に改宗するときも、やはり水の中にとっぷり入れて、そして悔い改めて清められるというような意味で、洗礼のヨハネがやっていたわけです。

26 **ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に知らぬもの一人たてり。27 即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の紐を解くにも足らず』**

と。それでキリストがそこに来ていることを知っているわけです。「あなた方の知らない人がその中に一人いるよ」と言う。

●神の羔羊

28 **これらの事は、ヨハネのバプテスマを施しいたりしヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。**

29 **明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。30 われかつて「わが後に来る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。**

「先におられたから優れている」と、ちょっと妙な言い方をしている。別にそう論理的にここのところがつながりがあるわけではないと思いますが。忽然として、

「世の罪を除く神の羔羊」

と言った。羔羊のことは旧約にたくさん出ている。もうご承知のとおり、燔祭の羊、当歳の疵なき羔羊を献げるということが出エジプト記14章に詳しく書いてある。旧約聖書では羔羊によるところの罪の贖いを、大祭司が一年に一回執り成しをやる。至聖所において一年に一回入って、その執り成しをするということはヘブル書に書いてあるとおりです。

ところが、今度はいわゆる羊の小さい子羊ではなくて、「羔」と言われるところの一人

のひと。これを特に「神の羔」と言ったわけです。「ホ・アグノス・トゥー・テウー」と書いてある。

「贖罪がこの人によって本当に新しくできるんだ」

と、宣言をした。自分は水で一時的な清めをするかもしれないが、罪の取り除きということにはならない。悔い改めということをさせるきっかけはつくっても、本当の悔い改めもできなければ、本当の罪の除きもできないということは、洗礼のヨハネが自覚しているところです。

31 我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに顕れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり』

「顕れんために」という訳がしてありますけれども、「証(あかし)せられんために、自ら証しするために」というような、むしろ証の気持をもった言葉です。

32 ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鴿のごとく天より降(くだ)りて、その上に止(とどま)れり。33 我もと彼を知らざりき。然れど我を遣し、水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止(とどま)るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。34 われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』

そういうように語っているわけです。

●エッセネ派

１９４７年に「死海写本」というのが発見されました。遊牧の民の少年が山羊を追いかけていたところが、蜘蛛の巣がかかっているような穴があった。少年ですから、面白半分にその穴に小石を投げ込んでみたら、カチンと音がする。少年はなんだかおかしいと思って、穴に入ってみたら、そこに壺があって、その中に、驚くなかれ、旧約聖書のイザヤ書の写本が入っていた。持って行って学問上調べたら、そういうことになった。もちろん、穴は一つばかりでなくて、二百ばかり次から次と見つかったそうです。それで特に11の穴の中には極めて大事ないろんな写本の断片が出てきて、結局合わせると何百という写本です。断片です。未だに研究は全うされていないようですが、大体の結論は出てしまっているわけでしょう。

その中に写本ばかりでなくて、エッセネ派という人たちの記録が出てきた。エッセネというのは、サドカイ、パリサイ、エッセネという、当時三つのユダヤ教の派があって、エッセネ派というのはやはり非常に水の洗礼を、清めのことを重んじていたそうだ。多分、洗礼のヨハネもそのエッセネ派の人ではないかと言われているわけです。この連中は、初めの一年間はそのグループに属しても、まだ志願者であって、その次の第二、第三の二年間は見習いで、第四年目から初めて正会員になるという、なかなか厳格なんです――うちの

集会なんかはすぐ正会員みたくなってしまって、それで出たり入ったりでは本当は困るので、もうすこし厳しくやってもいいかとも思いますけれども――そして、非常に共同の生活をして、互いに助けあっていた。

今、イスラエルに「キブツ」というのがある。精神的な共産的な生活をしていて、お互いに私しない気持の在り方をやっている。非常に健全なわけです。20歳くらいまでの青年男女が同じ部屋に寝起きしていて、ひとつも間違いが起きないというように、明るい明朗な交際の仕方をしている。自分たちの労働に対して、自分たちに必要なものは何でも与えてくれる。明るく労働を楽しんでやっているそうです。ユダヤ人でなければできない。日本なんかでまねしようとしたって、それはできやしない。やはり、ユダヤ人というのは特別に選ばれた民で、深い律法を身につけている。律法はもちろん、外側から守るというだけではないので、彼らは律法を喜ぶという面もたしかにある。けれども、また非常に一面、頑固なところもあります。

そのエッセネ派というのが特にそういった意味において水の洗礼を施していた。洗礼のヨハネもその一人であったと思われる。ところが、そのエッセネ派の水の洗礼に対して、彼は新しい人にぶつかったわけです。その人は自分たちとはケタが違う。その靴のひもをとくにも価しない。この人は即ち、聖霊をもってバプテスマする。もちろん、昔の預言者たちは御霊をもってバプテスマされた人たちでした。預言者として立ち上がった者たちは――世襲的に預言者になった預言者の群というのもありますけれども――それではなくて、本当に自ら神の声を聞いて立ち上がった。アモスでもホゼアでもみんなそうです。預言者エレミヤは祭司の子だけれども、しかし彼は、祭司としてではなくて預言者として立ち上がった。これはみんな自分の決意とか何とかということではない。明らかに御霊において神の声を聞いて立ち上がった。

預言者のうちの特別な預言者が、最大のケタ違いの大預言者が顕れてきたのがイエスです。イエスはもはや預言者という範疇に実は入らない。フイフイ教あたりではキリストというのは預言者としてであるわけです。また、ユダヤ教それ自身が、ユダヤ人それ自身がキリストを「メシヤ」、本当の「救い主」とはしないんですから、そこに大きな躓きがあるわけです。これだけのことが新約聖書に証されていながら、ユダヤ人がなおこれに躓いている。サウロ自身が大きな躓きをしていた。そして、これが大転回をした、その証が新約聖書にあるのに、今もなおユダヤ人がこれに躓いている。よほどこのユダヤ人というのは、世界中で最高に頑固な民である。律法に凝り固まっている。正直、向うに行くと、嫌になってしまうほどに律法的な民ですよ。

そこを突破したのが、このキリストです。イエスは、ある意味において、律法を破ってしまった。破ってこれを全うしたので、

「律法の一点一画も崩れない」

とキリストは言っておられるけれども、それは「律法の一点一画」という言い方をして、キリストは本当の意味における律法を言われたのであって、もしこれを文字通りに受けとったら、律法の一点一画は、実は外側からは大いにキリストは破ってしまった。

●鳩の如く

そういう、特別に御霊が臨んできた人。これはマタイ伝3章、マルコ伝1章、ルカ伝3章に出ている。

「イエスがバプテスマを受け、直ちに水より上がりたまいしとき、視よ、天開け、神の御霊が鳩の如く降りて、己が上に来るを見たもう。そして、天から声があって、『これはわが愛しむ子、わが悦ぶものである』と」

というのは実はイザヤ書42章に原型がちょっと出ているような言葉です。ここにも

「御霊が鳩の如く」

という不思議な言葉が出てます。

「御霊、形をなして鳩の如くその上に降り」

とルカ伝にも書いてあります。今日は、特に「羔と鳩」という題を出した。「鳩」はそうたくさんは旧約聖書に出てませんが、一番先に出てくるのが例の創世記の洪水のときに出てくる鳩です（創世記8章）。

鳩は、人がちっともこれを傷めませんから、彼らは本当に人に親しんで、逃げようともしない。誠におとなしい鳥です。とぼけたような顔してますが。この鳩が実に高く高く昇る。そしてまたもの凄い距離を自分の目的に向って――どういう感覚だかしらんが見当づけて――飛ぶ。伝書鳩というのがあるでしょ。なんと不思議な鳥かと思う。非常に従順で優しいんだが、その翼はまた素晴らしい力を持っている。また、ある一つの霊覚的な感覚をもって目的地へ間違いなく飛んでいくという。また、親鳥の枝の上には子鳩は止まらないという、非常に秩序を重んずる親孝行の範にもなる。そういう鳩であります。詩篇68篇15節に、

「たとえ彼らは羊の檻（おり）の中にとどまるとも、鳩の翼は鉄（くろがね）をもって覆われ、その羽はきらめく黄金をもって覆われる」

なんていう妙なことが書いてある。羊の魂、鳩の翼。イザヤ書60章8節に、

「雲のように飛び、鳩がその小屋に飛び帰るようにしてくるものは誰か」

なんて、鳩が雲のように非常に高いところから小屋に飛び帰るというようなことが書いてある。

そういった霊的な、そして平和な、しかも非常に空中を自由自在に飛ぶような不思議な鳩。特にその従順さというものは、羊と鳩が同じような性格をもっている。このキリストが「羔」と譬えられる。また、聖霊が「鳩の如く」と言われるというところに不思議な同質性を感

じるわけです。「神の羔」と題していつか夏の特別集会でお話したことがあります。35号か何かで書いた。あれはちょっと大事な論文ですけれども。神―御霊―キリスト。御霊は即ち鳩をもって象徴され、キリストは羔をもって象徴されるわけです。

〔註：「曠野の愛」誌 第35号１９６０年晩秋 武蔵野伝道二十周年記念号。「神の羔」―福音の根本構造序説―（１９６０年８月19～21日　第７回夏期福音特別集会（伊香保）第五講、８月21日午前の内容）。著作集第９巻『感想と紀行』57頁／第一章「告白と論説」／「九、福音の根本構造序説」に所載〕

●「アルミオン」

そういう聖霊のバプテスマを施す方であった。「羔」という表現は、一番たくさん出ているところは聖書のどこだと思いますか。ギリシア語で「アグノス」という言葉と、「アルミオン」という言葉がある。「アルミオン」「羔」という言葉は、あるところでしか使っていない。ただ一カ所例外として、「アルミオン」という言葉がヨハネ伝21章5節に出ているんですが、あとは全部、あるところにしか出ていない。そのあるところというのは黙示録なんです。黙示録には、始めから終りまでこの「羔」「アルミオン」という言葉が畳みかけて出てくる。やはり、ヨハネでありまして、ヨハネの黙示録といわれるように、ヨハネ的なものであります。

ちょっと黙示録を開きましょうかね。たとえば、７章14節に、

「14**我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大なる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。**

これです。羔の血で自分を洗って白くした。水で洗ったのではなくして、羔の血で洗った。即ち、これが贖罪のことをこういう表現をしているわけです。そして、

15**この故に神の御座の前にありて昼も夜もその聖所にて神に事う。御座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。16彼らは重ねて飢えず、重ねて渇かず、日も熱も彼らを侵すことなし。17御座の前にいます羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり』**（ヨハネ黙示録７・14～17）

このヨハネ黙示録７章のところは素晴らしいところです。「キリスト」と言わないで、みんな「羔」と言っている。ずっとお読みになると、しばしばぶつかりますから。特に14章をみると、

「1**われ見しに、視よ、羔羊シオンの山に立ちたもう。十四万四千の人これと偕に居り、その額には羔羊の名および羔羊の父の名、記しあり。……4彼らは女に汚されぬ者なり、潔き者なり、何処にまれ羔羊の往き給うところに随う。彼らは人の中より贖われて神と羔羊とのために初穂となれり。5その口に虚偽なし、彼らは瑕なき者なり。**」（ヨハネ黙示録14・１～５）

と書いてある。５章８節には、「羔羊の前に平伏した」なんて書いてある。

「8**巻物を受けたるとき、四つの活物(いきもの)および二十四人の長老、おのおの立琴と香の満ちたる金の鉢とをもちて、羔羊の前に平伏(ひれふ)せり、此の香は聖徒の祈祷(いのり)なり。**」（ヨハネ黙示録５・８）

要するに、「キリスト」と言うかわりに、この黙示録では「羔」と書いてある。そして、６章のところに、「羔羊(こひつじ)の怒」という言葉がある。およそ怒らないものが羔ですが、羔が怒るという。

「16**山と巖(いわ)とに対(むか)いて言う『請う我らの上に墮(お)ちて、御座に坐したもう者の御顔より、羔羊(こひつじ)の怒(いかり)より、我らを隠せ。17そは御(み)怒の大なる日既に来ればなり。誰か立つことを得ん』**」（ヨハネ黙示録６・16）

一番柔和なものが怒る。これは獅子が吠えるよりか恐ろしい。羔の怒という。

●聴く耳あるものは聴くべし

今朝、テレビで宗教のことをやっていた。青年がたくさんいて、

「信仰のある人は手をあげろ」

と言ったら、一人も手があがらない。「ない人は」と言ったら、みんな手をあげた。カトリックの坊さんで外国人ですが実に日本語が達者な人で、「お手上げだ」なんていう言葉も知っていましたが、それが問答をしていた。なかなかやんわりと取り扱っていた。私なら、すぐ大喝してやるところなんだけれども（笑）。とにかく、青年が、

「一体、宗教というのはなにか困ったときの神頼み式で、なにか意気地がない。自分で考えて、自分で決意してやったらいいじゃないか」

というようなことや、

「信仰というのは、仕方がないから、なにか依り頼むものが時々欲しくなるので、それを偶像みたいに拝んでいるんだろう」

なんて、およそ幼稚なことを言っている。幼稚な妙なまちがった常識で宗教というものを考えている。それで、

「そんなものは要らない」

というようなわけです。皆さんは、若い方々がいらっしゃいますが、その友人たちは、なにか問答すれば、大体そんな見当からいろんなことを言って、あなた方にくってかかるんだろうと思いますが。私は青年に学校でもちょいちょい言う。

「君たちは、心がないか。心が、魂がないか。いくら唯物論者でも、魂も心もないとは言わないだろう。私は物ですなんて。心、良心、魂があるということは確かだ」

と。全然、宗教というものに関する考え方が違ってますから。もう出発点からして違っている。

「心があり魂があるということが、実は宗教を持っていることだ。信ずるとか信じないとかということではない。そのような人間そのものが実は誰でもが宗教人なんだ。一体、君の顔が他の人と同じ顔があるか。一つもない。君の顔というものがとにかく或る絶対性を持っているではないか。類似なものはない。顔すらも絶対性を持っているので、存在そのものが或る絶対性を持っているということが、その心の本質なんだ。ところが、残念ながら心がその絶対性というものに本当に触れていない。その絶対的なものに触れるということを根本的に必要としている。そのことに気がつくまではしょうがない。まぁやってごらん」

というわけで、突き放すわけです。そして、

「どうにもならんと思ったら、自分で本当にぶつかって、いろんなものを読んだり、経験もしてごらん。結論をそんなに早く出す必要はないから。そして、いよいよというところの限界状況にきて、初めて、その相対的なところから、その限界から絶対の世界に突き抜けなければどうにもならんように実は心ができていた。魂というものができていた、ということに気がついたら、そのときに、もうあるもないもないということに君はわかるだろう」

と、まぁいうようなわけです。その牧師さんも言ってました。たとえば、このごろやってきたハイゼンベルクのような、ああいう素晴らしい頭脳をもった人がちゃんと立派な信仰を持っている。決して偶像を拝んでいるのでも、なにか苦しいときの神頼みでも何でもない。魂の世界のことを、そういった単なる知の面からいくら解るの解らないのと探索しても、それは見当違いなんだということをハッキリ自分で自覚するまでは仕方がない。だから、お釈迦さんも、

「いくら法を説いても実は説かなかった」

と、半端なことを言いたくなるわけです。キリストも面倒くさいから、

「聴く耳あるものは聴くべし。俺は説明なんかしないぞ」

と。こういうことです。

本当に生きている人、本当に生命のある人を視ろと。その人はキリストである。福音書のキリストにぶつかって――何のかんのと言っているうちはダメだ――無条件にこの人に降参したならばその世界に入れる。それまでは入れないし、神さまはわからない。そういうわけです。

●神一切

そのイエスという方が実に「羔」という不思議な表現をもって表わされる。もうこれから先は、私はあなた方に何も言わなくたっていいくらいなことで、もういつも申し上げているとおりです。そういった、神一切ということ。イエスみたいな驚くべき人物が、

「自分は何もできない。何も言えない」

と言っているではないか。我々が何かできるような顔したらとんでもない傲慢だ。百％に自分の魂を、全存在を神にぶちまけているから神の力がそこに集中して燃えているわけだ。

羔は、さっきイザヤ書で読んだとおり、懐に入れられて、神の懐の中にあるこのか弱き羔は、実は神の力あるものに自分がさせられていく。神の力がそれを通して――「力」と言っても、ただ腕力ではない――一切のオールマイティな、その義もその愛もその知恵もすべてが展開していく。この自覚において、もはや単なる信仰、

「キリストを信ずる」

というようなことが、もう今までの教会や単なる無教会の「信ずる」というような普通の概念ではどうにもならないということがハッキリしてきたと思う。もうこれは体で受けとる、体受していかなければダメです。この体受することが即ち、聖霊のバプテスマという、この一点にかかっているわけです。

水のバプテスマではどうにもならん。外側からいくらきれいにしてもどうにもならん。

「殺人した手の血の臭いはアラビヤの香油もこれをとるわけにはいかない」

という、有名なシェイクスピアの中にでてくる言葉です。即ち、私たちはどんなに自分の努力や外側の儀式やいろんなことをもってしても、断食をしても何をしても結局、それ自体はどうにもならん。これは完全に自分を神に委ねた唯だ一人の人、ただ一人の義人、唯だひとつの羔によるしかない。

キリストという羔は他の子羊とはちがう。「羔」というこの暗号的な表現をもって言われているところのこの人。ここにおいて完全に自分をゼロにしたところの人が証している事態。これがケタ違いです。どんな偉そうな哲学者も神学者も、いかなる人間でありましても、到底これにかなわん。教法師も祭司もみんなキリストにはかなわん。この素人の、大工仕事の手伝いみたいなことをしていたこの人には。

まぁそれだけ思っても、痛快でしかたがない。私は本当に痛快でしょうがない。もうカトリックだの、プロテスタントだの、無教会だのと、何を言っているかと。言葉は少し乱暴ですけれども。要するに――みんな「キリスト、キリスト」と言うさ、言うけれども――何か自分の枠をもってキリストを見ているじゃないか。枠は外しなさいということ。キリストにぶつかるとか、キリストを見るためには、自分の側の一切の枠が外されなければ、本当に見えてこない。見えたような顔しているけれども。無教会主義をもってキリストを限定して何になるか。

●懐の事態

だから、パウロが、

「私はキリストと偕に十字架された。そして、キリストが自分の中に入ってき

た。自分がキリストの中にきた」

という、この「懐（ふところ）」の事態です。この懐の事態になって、パウロはものが本当に言えるようになったし、できるようになってきた。ヨハネもペテロもヤコブもみんなこの懐の事態です。その点では中世の神秘家の中には確かに或る大事な角度があった。それを忘れてしまっているからダメです、

「神秘はどうも……」

なんて。私は無教会にいたときも、この「神秘」という言葉がやはりあまり気に食わないような言葉に感じていたけれども、実は神秘という言葉は聖書の中にちゃんとあるんだ。「ミステリオン」「奥義」という言葉です。

この奥義の世界というのは、なにか悟って奥義に入るのではない。この奥義は、聖霊のバプテスマを受けて、キリストを、御霊を宿すことにおいて初めて奥義の世界に入る。自分自身が即ち、羔となるまではダメなんだ。自分自身がこのキリストという羔と共に羔になる。

この御霊において私たち自身が羔となり、私たち自身が鳩となる。「羔と鳩」というのはもはや動物のことを言っているのではない。これをもって象徴されているところの「鳩」となり「羔」となる。自由自在なその翼はもはや何ものもこれを遮（さえぎ）ることができない。私はもし人間でなければ、全く鳥になりたい。特にこの鳩になりたいね、燕でもいいけれども。燕だとか鳩だとかに。鳩の如く高く飛翔し、燕の如く自由自在に翻（ひるがえ）っていくような姿。

そういった霊的な素質とその自由さが鳩にある。これはもの凄い霊的な自由です。羔は完全に神に全託している姿。この全託の姿と自由さ、これが一つなんです。こっちは全く不自由なんです、全託している。全くあなたの如意のままというやつ。それが備わってくると、今度は鳩のような自由がそこに出てくる。だから、羔と鳩というのは非常に我々の実存の姿を、御霊における実存の姿を表わしている二つの言葉です。まことに平和であるのが、力がないようにみえて、驚くべき力を持っている。

そして、どうですか。ヨハネ黙示録の一番終りの方にやってくると、21章に、

「22**われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊（こひつじ）はその宮なり。**23**都は日月の照すを要せず、神の栄光これを照し、羔羊はその燈火（あかり）なり。**」（ヨハネ黙示録21・22～23）

と。そんな言葉は普通の人にはわからんですよ、

「**羔（こひつじ）が明かりだ**」

なんて何のことやら。ヨハネはどこまでも、この

「屠られたるキリスト」

という自覚が深くある。屠られたキリストという自覚があるから、十字架のキリストという自覚がこの「羔」の中に入っている。しかしながら、十字架で突破した羔は、本当に自

由なる力ある権威ある、聖霊の王者でありますから、もはや神殿も何も要らん。そして、その21章にくると、新天新地がやってくる。それは上から来るところのエルサレムである。

●神の国

シオンとか、エルサレムとかいう。ユダヤ人がエルサレムは分かたれるべき所ではないと主張する。私もユダヤ人に同情します。せっかくの聖都エルサレムは分かたれてはいかん。3日戦争、4日戦争で勝ったのだから、他はみんな返してもいいが、エルサレムだけは統一したものにしたい。ドイツ人ならベルリンだけはと言いたいところでしょう。けれども、

「わが国はこの世のものならず」

とキリストが言われた。この地上のエルサレムに、もしユダヤ人がそれだけの意味において執着するならば、それはやはりユダヤ人的なエルサレムであって、新約聖書においてキリストが、

「神を拝する時がきた。もはや、ゲルジムでもエルサレムでもないぞ」

と言った。

「至る所これエルサレム、至る所これ神の都である」

というような、

「もはやそこにはもう神殿もなければ何もない」

といった、この驚くべきキリストの天のエルサレムというものを受けとらないというのは、やはりユダヤ人のひとつの大きな躓きである。政治的にユダヤ人がなおエルサレムというものに執着しているならば、これはひとつの躓きである。パウロがローマ書12章で言っているように、時が満ちて最後に彼らが悔い改めたならば、その時は本当に天的なエルサレムがそこに自ずから展開してくるでしょう。しかし、地上のエルサレムそのものに、その角度から執しているならば、ユダヤ人はダメです。本当に悔い改めたならば、自ずからして新しい意味においてのエルサレムというものがユダヤ人に与えられるだろう。しかし、そのような歴史の最後というものは、誰かそれを端倪（たんげい）することができるか。この全世界はひっくり返るようなことが書いてありますから。聖書は、このまま全世界がめでたしめでたしに神の国になるとは書いてない。

そういう意味において、まことのエルサレムの民ということ、

「自分たちはアブラハムの裔（すえ）であることを誇るな」

と、キリストは言っている。

「血統的なことではないぞ。霊的な意味におけるアブラハムの裔であることを自覚しろ。しからば、アブラハムの裔は異邦人の中にもあるのだ」

と。即ち、イスラエルの民が選ばれたということは、それを通して全世界に本当にアブラハムの子、また本当のダビデの子といわれる天上のメシヤ、そのキリストの王国の民となる。

そのときは、全世界が神の審判を見てからのはなしである。黙示録に語られているところの驚くべき審判が次から次へと重なってくることが示されています。それは大変動がきてからあとのはなしで、もはや人間が憶測することのできない事態です。けれども、それにもかかわらず、我々は本当にこの地上を神の国にしようと、何とかして

「御意の天に成る如く地にも成らせよう」

と、この御霊の実存において歴史に参与し、それに努力するということは正に福音的な実存の在り方である。

「今にひっくり返ってくるから、地上で何をしたって、そんなことは大したことではない」

ということではない。どんなに空しいようにみえても、本当の業は決して消えていかない。天に記されてある。

「汝らは即ち活ける文字である」

という自覚のもとに、私たちは神の定め給うところの、贈り給うところの都を待望する。その神の都は、もはや神殿もない。ただ

「日月の照らすを要せず」

と示されているところの、何かしらんけれども、本当に神の光の遍照するところの、再臨のキリストが本当に王者として――この世の王者と言う気はない――来たり給うところの主。

そういう意味における「天のエルサレム」ということに対する大きな希望は、ついに藤井先生も、ダンテもそこまで謳いきれなかった。誰かそのことを本当に謳うべき使命を持っているわけです。人が歌わなければならない最後的な黙示録的な歌をうたわないではいられないという念願に私もかられるわけです。もはや、ボヤボヤしていられなくなってきましたけれども。

とにかく、「羔」という言葉がそれほどまでに最後的な、聖書の示しの最後的な大事な表現として、神の国の最後のキリストのことが――ただ黙示録において「アルニオン」という言葉だけが使われて――「羔」のことが歌われいる。

●十字架という関門

「視よ、神の羔」

と、ヨハネが示したところのこの事態が、屠（ほふ）られる羔であり、また王の王者として君臨するところの「羔」である。本当の怒りを持った羔である。最後の怒りにぶつかったら、もうこれは仕方がない。滅びてしまう。一番とっておきの事態。怒りということは審判ということです。そして、救いが約束されているわけです。この羔、屠られたる羔によって私たちが完全に罪を贖われたと、贖われていると、また贖われつつあるという事態です。

「罪」というと、なにか自分の悪い事というような感じ方をして困るね。「我という罪」なんです。我そのものが罪。キリストは言われたでしょ、

「自分自身を憎まなければ私の僕とはなれない」

と。「自分自身を憎む」というのは自分自身が「罪」だからです。「罪びと」という言葉はみんな言っているけれども、即ちこの「自己中心であるところのもの」です。なんのかんのとみんな偉そうなことを言っているけれども、結局それはどうにもならない。はやく、この聖書が示しているところの、驚くべき事実をもって、十字架の贖罪の事実をもって迫ってくるところの、

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし」

と言って、天地を貫く義の叫びをされたところのこのキリストに来てください。

「彼らを赦せ」

と言われた。これは義と愛の言葉ですよ。「彼らを赦せ」というのは、

「この十字架をもって彼らを赦してやってください」

ということ。

「なぜ、私をお捨てになったか。この天地を貫く義が倒れてたまるものか」

と。「なんぞ、捨て給いし」というのは別な言葉で言うと「羔の怒り」です。この二つの義と愛との事態にぶつかって、

「聖書は神話であるの何のかんの」

と言っているうちは、ダメだ。

どうぞ、皆さんは本当に権威あるクリスチャンになってください。この権威あるキリスト者というものは、これはもう本当に十字架されて、聖霊のバプテスマを――水のバプテスマでははない――聖霊のバプテスマを本当に受けて、キリストの懐に入れられ、自分自身が羔とされ鳩とされたような、そういったような自分というものの、その恩寵の事態を受けとったら、もうこれは人の権威ではなくなる。

こないだから、いろいろ外国の大国の首相が話しあって、大体折り合いをつけて、地上の力がどうのこうのと操っているよ。けれども、そんな操りはどう変わるかわからない。恐いのは水素爆弾でも何でもない。この人間の中に宿っている心である。

この心が、魂が、息が、これが毒せられている。これが悪いことをする。悪魔が巣をつくっている。その心がどうにもならないところにこの宗教的突破がいるんです。この心がいっぺん無心とならなければダメなんです、「心、心」なんて言って、自分の心を何ものかと思っているうちは。無心の心の世界に入らなくては。そうすると、イスラエルの、また世界の歴史をとおして神が忍耐をもって待つ。やがて来らしめんとする神の偉大な経綸です。

「神さまがつくったのに、なぜ、この世にこんな悪いものがあるのか」

なんて、すぐそういうようなことを言い出す。理屈で外からどうのこうのと言うけれども、

事実を見てくれと。この事実の奥の世界は、我々が相対的な判断でこれを解決することがもしできるならば、何も今までにキリストやお釈迦さんが出てくる必要はなかった。これは徹底的に自分を越えなければ、その解決の道がこないということを彼らは示している。それを口はばったいことを何のかんのと言ったら、

「まず、仏典や聖書をしっかり読んでからものを言ってくれ」

と言いたくなる。聖書を読むというのは、この十字架という関門から入って――十字架のバプテスマと言ってもかまやしない――聖霊のバプテスマを本当に受けることです。

●聖霊のバプテスマを受けよ

このことは、ローマ書6章にもっともよくパウロが語っているところです。

「1されば何をか言わん、恩恵の増さんがために罪のうちに止まるべきか、2決して然らず、罪に就きて死にたる我らは争で尚その中に生きんや。3なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを

キリスト・イエスの中へとのバプテスマを、

受けたる我らは、その死に合うバプテスマを受けしを。4我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。

十字架されたから。

これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。5我らキリストに接がれて、その死の状にひとしくば、その復活にも等しかるべし。6我らは知る、われらの旧き人、キリストと共に十字架につけられたるは、

元来の私たちはキリストと共に十字架につけられたるは、

罪の体ほろびて、此ののち罪に事えざらん為なるを。7そは死にし者は罪より脱るるなり。8我等もしキリストと共に死にしならば、また彼とともに活きんことを信ず。

活きんことを受けとるのであると。

9キリスト死人の中より甦えりて復死に給わず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。10その死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活き給えるは神につきて活き給えるなり。11斯くのごとく汝らも己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思うべし。」（ロマ6・1～11）

「キリスト・イエスに在りて活きたる者」

ということをしっかりと受けとりなさいと。もう、ハッキリしている。キリストと共にもう死んじゃっている。あいかわらず、生半可に生きてますよ。しかし、そんなことは問題

じゃない。

「まだ私は本当に死に切らないで、なかなか死に切らないで困ります」

なんて。いつになったら、死に切るつもりですか、自分が。そんなことなら、もう私はやめるよね。死に切らないやつだから、キリストが死んでくださった。だから、私はそれを受けとって、

「はい、私はもはや死んだ者です。死者であります」

と。ところが、そこにキリストが、

「私のこの聖霊のバプテスマを受けよ」

「はい、いただきます。自分は十字架で吐き出されましたから、あなたを吸い込みます」

と。今度は本当の生者です。もう何と言おうと、自分の魂はキリストの御霊を呼吸しているもの。御霊の中にあって生きている。「聖霊にてバプテスマ」と書いてあるが、これは

「聖霊の中でバプテスマをなし、また、聖霊の中でバプテスマを受ける」

という言い方をしている。そして、

「御霊が降って、留まるのを見た。その中に宿るのを見た」

と。御霊が宿り、御霊の中に宿る。そういう事態になってしまったものが本当の生者です。私たちは生者です。

●キリストにあって生きる

あなた方は本当に生きているでしょうね。そしてまた、

「本当にキリストにあって生きる。もう私は死んだもので、そんなものはもはや問題にしてません」

という面がハッキリあるでしょうね。そうしたらば、本当の権威が出てくる。それまでは、まぁ仕方がない。けれども、どうぞ、そこを祈りの世界で、かつまた毎日の生活の中で体験していってください。一週間毎になにか変わってくるという人になっていただきたい。ゲーテが言っているでしょ、

「シラーは一週間毎に変わっている」

と。シラーという人はいわゆるクリスチャンではないけれども、本当に理想に向って追求してやまずという、

「あの人は生れつきちょっとキリスト的である」

なんてこともゲーテが言っている。

そういうように、「躓いても転んでも前進しています。私はとにかく、3メートル後に滑ったかと思ったら、今度は5メートル先に進んでいます。プラス・マイナス2メートル先に進んでいます」というようなことが言えるような、どんなマイナスの経験も必ずプラスに

変えていくような魂になってください。それはなれますよ、この聖霊の力で。へこたれない。

「せん方つくれども望みを失わず」

という。一切の体験をプラスにしていくようなことは、自分の意気込みとか何とかではダメです、これは御霊が来なくては。

「最悪にみえるような事態になっても、運命を最善に変えていく。これが本当の勇者である」

なんて、ブランニングが言っているけれども、そのとおりです。親鸞でも、道元でも、日蓮でも、彼らはみなそういうような経験を仏教の世界で自分でもってやってきた。いわんや、私たちは、キリストの御霊におきましては、この聖霊のバプテスマということが何といっても一番大事です。

キリストの伝道の門出にこの一点がなかったら、キリストはいくら神の子なんていっても伝道はできませんよ。

「神の国は近づいた。汝ら、悔い改めて云々」

と叫びだしたのは、このヨルダンの悔い改めのバプテスマを直ちに聖霊のバプテスマにしたところのキリストでした。荒野でサタンと取っ組み合って、完全にキリストはそのときにやはり羔でありまた鳩でありました。そして、自分で御霊の事態を私してはいやしない。単純に父の御意によって勝ってしまった。父の御意のあるところには力がある。父の御意の発するところには必ず力がある。御意というものは何か力がないみたいに思ったら、とんでもない。

とにかく、私たちが集会をしているということは毎回が、煮詰めてみれば結局、聖霊のバプテスマをより深く受けて進んで行くということ。この関門を通ったならば、聖霊の中でバプテスマをし給うところのもの、聖霊の中に深くとりいれてバプテスマをし給うところのもの、このキリストの中に、キリストの懐の中に深く入っていきます。

●一切の秘訣

パウロは使徒行伝で聖霊のバプテスマを施したことが16章のところにも出ているし、皆さん一人びとりが、本当に、行き詰まっている人に祈りをもって、十字架のバプテスマと聖霊のバプテスマへと導く、そういった使命をおびておられる。一人のひとが御霊のバプテスマを受けて、魂が本当に喜ぶのを見ることほど私にとって地上でうれしいことはひとつもない。その人が本当に聖霊の喜びに立ち上がること、これが私の一番のうれしいことです。

そうすると、何か横の人がね、

「なんだ、あれは少し自己陶酔に陥っている。暗示にかかっている」

とか、いろんなことを言う。何とでも言わしておけばいい。聖書に自らを顕されたこの羔、

キリスト、その十字架とその復活の生命、御霊に与(あずか)った。それで入った喜びは他のよろこびとは質がちがう。何と言われても、皆さんは、そんなことでもってびくともしてはいかん。また、本当にその世界に入れば、そんなことにはびくともしなくなる。どうぞ、そういった意味における権威ある証人として進んでいただきたい。

「我々はカトリックでも、プロテスタントでもない。使徒的な、アポストリック精神に生きるところのクリスチャンでござる」

と。こないだも言いましたように、半ばキリスト教徒、生半可なキリスト教徒ではないと――なにも宣言することはないけれども――身をもって大いに証してくださるようにお願いします。

そして、福音の本当の逆輸入をするようなことになる。向うでは何か形式的なものや、おそらく、アメリカでもドイツでも無宗教が多いからね。そんなところにおいて毅然(きぜん)としてやってください。キリスト教が大きなズレをきたしているからそうなるのは無理はない。しかし、本当の福音の世界に入ったら、ズレどころのさわぎではない。限りなく進んでいきます。世が不信になればなるほど、単なる政治的なもので左右されたりする。政治が本当の政治となるなら、それはどうしたって、リンカーンやグラッドストーンみたいな政治家が、本当に信仰の上に立っていた政治家が、

「もう、からくりはやめようではないか」

というだけのことが言えるような政治家が出てこなければいかん。そうしたら、他の政治家からすぐ蹴落とされるかもしれない。けれども、一番最高の政治家は政治家ならざる政治家です。すべて最高のものは色のつかない世界ですから。

どうぞ、皆さんが何をなさっていましても、これからどういうような人生を歩まされても、パウロと共に、

「**一切の秘訣を得たり**」

という世界に入ってもらいたい。そうでなければ、聖書の証人ではない。この「一切の秘訣を得たり」という事態は、

「聖霊のバプテスマを限りなく深く受けていく」

という一点にあるだけです。